

皆川淇園の言語研究¹

——その意味論と構文論的な試みを中心に——

李 長波

1 意味論的な試み — 言語における人称の問題

言語における人称の問題には二つの側面がある。その一つは、言語にとって人称代名詞と指示代名詞は発生的にも本質的にも他の品詞、例えば名詞に先行する根源的なものなのか、それとも、代名詞の名の通り単なる名詞の代用なのかという問題であり、今一つは、人称代名詞における人称体系は他の言語表現、例えば指示詞、動詞、助動詞の機能に如何に関わっているかという問題である。言語における人称の問題については、ヨーロッパでは、古くはフンボルトの『言語と精神 —— カヴィ語研究序説 ——』（初版(1836)、邦訳(1984)を参照)において最初の明確な所説が見られる。フンボルトによれば、

さて、[言語の問題を考えると]、原点となるものは、言うまでもなく語り手自身が人間であることである。語り手は自然と常に直接に接触しているものであり、言語においても、自然に対して自我という表現を対置することをやめるわけにはいかない。しかし自我にはおのずから汝が与えられているのであって、この新しい[我と汝の]対立から、第三者の人称が成立してくるのであるが、この第三者は感ずる者、語る者という[人間の]仲間の埒外にもあり得るものであるから、そうなると、第三者・三人称は生命のないものにまでも拡大される。そこで、[原点となる]人間としてのあり方、すなわち、我は、すべての具体的な特質を捨象してしまうと、空間という外的な連関性と、感受という内的な連関性の中に存在することになってしまう。それ故、人称語には、[外的連関性の空間的表現である]前置詞と、[内的感受の直接の表れである]間

¹本稿は「皆川淇園の言語研究——その言語観を中心に——」(Dynamis, Vol.1, pp.113-134)に続くものである。前稿では皆川淇園の言語研究のうち特にその言語観に関わる側面を論じたが、本稿はその意味論と構文論的な試みを取り上げる。

投詞とが連繫することになるのである。というのは、前置詞というものは、空間ないし空間的な広がりとして考えられた時間が、人称概念と切り離し得ない空間内の特定の一つの地点に対してもっているさまざま関連性〔の表現〕に他ならないからであり、間投詞というものは、生きているという実感の純粋な発露だからである。それで、本当に単一で基本的な人称語は、空間の関連性、もしくは、感受の関連性の何れかにその起源を持つということさえ、あり得ることなのである。

(フンボルト(1984), p.164-165 下線は引用者による)

ここでは、人称代名詞は言語表現の根幹に関わるものとして捉えられ、とりわけ、一人称の「我」と、それを中心に広がる「他者」との対立が人称体系の中枢に据えられている。そして、この一人称の「我」とそれに対立するところの「他者」との関係が人称代名詞以外の言語表現にも色濃く反映されていると考えられている。フンボルトは「自然」という言葉を用いているが、これは言語外世界という意味の「自然」というよりは、言語表現の対象としてあるところの諸々の事物の意に解すべきであろう。そして、これには人称体系の一極を担う「汝」や「第三者」のような「他者」としての存在はもちろん、もろもろの言語表現が含まれると考えられる。

フンボルトのこうした考えに立脚して、Jak. Grimm(1819)やW. Scherer(1868)による経験的な言語研究²も、代名詞を言語においてもっとも後になって形成された品詞とみなすことはまったく誤った見方であり、人称代名詞はいわば「言語創造の基盤となる岩床」として、あらゆる言語のもっとも古層に属し、もっとも暗黒な、だがもっとも強固で変わりにくくもある構成分であるという見解に達したという(カッシーラー(1989), p.346を参照)。そしてヨーロッパにおけるこうした言語哲学の学問的な伝統、とりわけフンボルトとの学問的な連続があるか否かは詳にしないが、パーズ, C. S. は *Speculative Grammar, Chap. 3. THE ICON, INDEX, AND SYMBOL* (初版(1893)、邦訳(1986)を参照)において、代名詞と名詞との関係について次のように述べている。

現代文法は代名詞を、名詞の代りに使用される単語として定義している。

それは、十三世紀の初めに信用が失なわれ、数百年間文法から消えていた

²Jak. Grimm(1819), *Deutsche Grammatik*, Bd.1 Göttingen(p.335).

W. Scherer(1868), *Zur Geschichte der deutschen Sprache*, Berlin(p.215).

古い学説である。しかしその代わりに採用されたものはそれほど明確でなかった。そして中世思想に反対する野蛮な暴風が起きると、一掃されてしまった。アレンとグリーノウのもののような最近の幾つかの文法はふたたび事態を正常にした。「私」「汝」「あれ」「これ」は名詞の代わりに用いられると言う理由はない。それらはもっとも直接的な可能なやり方で事物を示す。主張がかかわるものを示すことは指標記号による以外不可能である。代名詞は指標記号である。他方名詞はそれが表わす対象を指し示さない。また何について語られているかを示すのに名詞が使われる時、代名詞なら直ぐに行なうことを名詞はできないという無能を償うために、聞き手の経験が頼りにされる。こういう訳で名詞の方が代名詞の不完全な代用物なのである。名詞は動詞を補うためにも役立つ。代名詞は、第一と第二の人物が適当な現実的結合を持っている任意のものを、第二の人物の注意をそれに向けることによって指し示すような単語として定義すべきである。アレンとグリーノウは「代名詞は名づけたり記述したりしないで人物や物事を指し示す」と言っている (Allen and Greenough (1877), *Latin Grammar*. (1884, p.128)。これは正しい、胸がすくように正しい。代名詞が何をしないかだけでなく、何をするかを言えばもっと良いかもしれない。

(パース, C. S. (1986), p.54-55)

一方、こうした言語哲学的な所説に対し、人称体系と他の言語表現との関わりについての実証的な研究には、インド・ゲルマン諸語の初期の指示体系を論じたブルクマン, K. (1904) がある。カッシーラー (1989) によれば、

インド・ゲルマン諸語の初期に関して、ブルクマンは三種の指示形式を区別している。一人称〔我〕指示詞 [Ich-Deixis] には内容的または言語的に二人称〔汝〕指示詞 [Du-Deixis] が対しており、この後者そのものがさらに三人称〔それ〕指示詞 [Der-Deixis] の一般的な形へと移行するのである。その際、二人称指示詞はその方向と、この方向に対応する特徴的な音声——これはインド・ゲルマン祖語の指示語根 *to にあらわれている——によって示されており、近さや遠さへの配慮はそこではさしあたりまだな

んの役割も演じていない。そこにはただ一人称の我への「対立」だけが、対象としての客体への一般的な関係だけがこめられているのであり、自己の身体の外部の領域だけがはじめてそこで際立たされ、限界づけられているのであり、つづく発達が、次にこの全領域の内部で個々の区域をいっそう明確に相互に際立たせるような方向をとる。つまり、これとあ
れ、こことそこ、より近いものとより遠いものとが区分されてくる。

(カッシーラー(1989)p.254.)

インド・ゲルマン諸語の初期の指示詞についてのブルクマンの研究で特に注目すべきは、インド・ゲルマン諸語の初期においては、指示詞には、まず一人称〔我〕指示詞〔Ich-Deixis〕と二人称〔汝〕指示詞〔Du-Deixis〕との対立があり、そして三人称〔それ〕指示詞〔Der-Deixis〕は二人称〔汝〕指示詞〔Du-Deixis〕から生まれたものであることを実証的に明らかにしたことである。とりわけインド・ゲルマン諸語の初期の指示体系は、「一人称」とそれに対立するところの「非一人称」との対立をなしていたことを示唆する発言として注目したい。

ちなみに、ブルクマンは、一人称「我」に対するものとしてあるものを「二人称」としているが、用語は「二人称」でも、その内実はやはり「非一人称」と考えるのが妥当であろう。何故なら、一人称〔我〕指示詞〔Ich-Deixis〕に対立するところの二人称〔汝〕指示詞〔Du-Deixis〕と、三人称〔それ〕指示詞〔Der-Deixis〕は、ともに一人称の「我」と対立する、「自己の身体の外部の領域」として卓立しているからである。これは、おそらく二人称と三人称との語形的な連関と同時に、その間の移行を保障するものであると考えられる。そして、この「自己の身体の外部の領域」こそ、一人称「我」に対する意味での二人称と三人称が共存する領域であり、そこには二人称と三人称との間の区別よりも、ともに一人称「我」に対する、「非一人称」として、同じ「他者」であるという共通性が際だっていると考えられる。とすれば、インド・ゲルマン諸語の初期の指示詞の二人称と三人称との間の移行も、別々に成立した二人称と三人称という二つの領域間の移行ではなく、「非一人称」という同一領域の内部における「二人称」と「三人称」への分化ということになる。インド・ゲルマン諸語の三人称指示詞も歴史的には「二人称」ではなく、この「非一人称」より分化したものとして見るのが可能である。この「一人称」対「非一人称」(first

person vs. non-first person)の対立は同じカッシーラーの言葉を借りれば、「この種の現象のうちに、言語というものが語り手のまわりにいわばある感性的・精神的な円環を描き、その中心に「我」を、そしてその周辺に「汝」と「彼」とを配置するものだというのが、直接あらわれている(カッシーラー (1989), p.273)」ということになるが、カッシーラーの所説も、言語表現における一人称「我」と「非一人称」の「他者」との対立を意識していると思われる。

ここで想起されるのは、通言語的には、言語表現における「一人称」対「非一人称」の区別は、「一人称・二人称」に対する「三人称」との区別が行われるまでは「一人称」対「非一人称」の段階を経過した言語は原印欧語を中心に存在するという泉井(1976)の指摘である。泉井(1976)によれば、古いヒッタイト語や古期スラヴ語において、動詞のアオリスト・一人称・単数形に対する二人称・三人称単数の形に区別がなく、二人称と三人称とが密接な一組であって、一人称の形がかえってこのグループから独立する現象があり、単数の二人称と三人称との間を区別する試みは原印欧語が分裂する直前のある時期に、共通にあらわれて来たという(p.262)。とすれば、これはもはやブルクマンの指摘した事実と符合する現象であることは明らかである³。それはともかくとして、ヨーロッパやアメリカには、こうした代名詞や指示詞を言語表現の根幹に関わるものとして考える先覚者がある一方で、東洋にあっては、易学によってその学問的基盤をもたらされた皆川淇園は、指示詞と名詞との関係を「正當無名」という術語を用いて次のように説いている。

正當無名ト云コトアリ。是文章ヲ書クニハ、第一ニ知ルベキ要義ナリ。

³原印欧語のように通時的に「一人称」対「非一人称」という人称領域の画定から「一人称・二人称」対「三人称」という人称領域の画定に変化した言語がある一方で、現代語まで動詞の活用形において「一人称」対「非一人称」の区別を守り通した言語もある。Roman Jakobson(1942)によれば、ギリヤーク Gilyak 語の動詞形は、一般に人称も数も区別しないが、「中性的叙法(neutral moods)」では、単数の「一人称」と「非一人称」を対立させている。そしてこの現象はルオラヴェトラン語族(Luorawetlan languages)に属する諸言語でも頻繁に観察されるという(p.617)。このように、共時的な意味においても、通時的意味においても、「一人称・二人称・三人称」という三つの人称は恒久不変の順序に、また一様均質的な面の上に鼎立するのではないと考えられる。そして、この三者の関係も、おそらく二人称と三人称との間に区別を設けるよりも、「一人称」とそれ以外つまり「非一人称」との対立をなす人称体系の構造類型と、「一人称・二人称」の対立を根幹として、この伝達の参与者に対するそれ以外の存在つまり「三人称」を対立させる人称体系の構造類型とが存在し、しかも「一人称」対「非一人称」の構造類型から「一人称・二人称」対「三人称」の構造類型へという変化の方向性があることが考えられる。因みに、古代日本語(上代から近世前期にかけて)の指示体系においても「一人称」対「非一人称」の対立が認められ、「二人称」と「三人称」は同じく「非一人称」から分化したものである(拙稿(1997)を参照)。

總別文字ハ、正シク其眼前ニ當レル事ニハ、用ユルコトナキモノナリ。
 故ハ、タトヘバ、今其人ノ目、火ニ向ヒテ居レバ、只此トノミ云テ、火
 ヲ指シ云フコト、自カラ聞コユ。花ノ枝ヲ手ニ握リ居レバ、只此トノミ
 云テ、花ヲ指シ云フコト、自カラ聞コユ。奴僕ニ云付テ、烟盆中ノ火入
 ニ、火ヲ入レサセントスルニ、只指ヲ以テ、其火入ヲ指シ見スレバ、火
 ト呼ハズトモ、火ヲ入レヨト云コトハ、聞取ルルモノナリ。故ニ正當無
 名ト云フナリ。正當ナレドモ、其人ノ心、他ニ属シテ居ル時ニテハ、正
 當ノ物ニテモ、名ヲ呼ブコトアリ。此ハ正當ナレドモ、不正當ト同ジコ
 トニアタレル故ナリ。文字ハ、即チ名ナル故ニ、文字ヲ用ユルコトニモ、
 正當ナルコトニハ、書ニ及ヌコトヲ知テ、ハツスベシ。

『淇園文訣』(下/33-34)

これは指示詞の機能について展開された所説であるが、更に名詞(名)の機能につ
 いては、皆川淇園は次のように説いている。

心ノ文ノ起リハ、象ナリ。象ナルガ故ニ、文ハ言語ヲヨセ合セテ、其
 物象ノ條理ヲ明カシタルモノナリ、ヨセ合サルル言語ハ皆名ナリ、名
 トハ乃チ象ノ符牒付ナリ。符牒付ナル故ニ、國國ニテ、言語ト名トハ不
 同ナリ。符牒付トハ、本邦ニテハ、ソラト云、漢人は、天ト云フノ類ナリ。
象ノ符牒付トハ、言語ノ上ニテハ、正當ニテハ、名ハ入ラザルモノニテ、
名ノ入用ハ、不正當ノ處ノコトナリ。不正當ナルヲ、呼出スガ名ノ用ナ
リ。故ニ、名ハ人心ニ覺ヘテ居レル象ヲバ、呼出シテ想ワスル為ノ符牒
付ナリ。言語文字ノ用ハ、究竟是ノ如キニ過ザルモノナル故ニ、言語ノ
ツヅキタル所ハ、畢竟象ヲハヨセ合セタルモノナリ。

『淇園文訣』(上/13-14)

ここに展開されている淇園の考えを整理して見ると、およそ次のようになろう。
 話し手と聞き手が面と向かっていて両者の間にある物に対する共通の了解があれば、
 話し手と聞き手の間には、指示詞とそれに伴う指差し行為で十分コミュニケーション
 ができる(「正當」・「正當無名」)。話し手と聞き手が面と向かっていながら、言
 葉を用いるというのは、聞き手の注意がその指示対象に向けられていない場合であ
 る(「不正當」)。指示詞は直接的に物事を指し示すが、名詞は人々の心の中に存する

「象」(物象・意味)を呼び出すための記号である。その意味では、指差し行為は音声言語の指示詞の代替であり、音声言語の名詞は指示詞の代わりになる。更に書記言語の文字、文章は音声言語の代わりをなすものであるというわけである⁴。指示詞は直接的に物事を指し示すのに対し、名詞は「象」(物象・意味)を媒介として物事に関わるとする皆川淇園のこの考えは、基本的に代名詞を言語表現の根源的なものとするフンボルトや、名詞は代名詞や指示詞の代用であり、代名詞や指示詞は直接に事物を指し示すのに対し、名詞は直接に事物を指し示さないとするパース、C. S. の考えに通じるものである。一方、こうした言語哲学的な行論に止まらず、皆川淇園は古代中国語の指示詞についての実証的な研究において、「彼」と「此」の対立を一人称「我」との関連によって次のように説明している。

【彼】 此字ハ此ノ反對ニテ、我ガ身神ヲツケテ居ル処ヲ指シテ此ト云ヒ、コト離レテ分ナル処ニ、別ニカマヘアル其内ヲ指シテハ、彼ト云フナリ、(中略)商君傳ニ、彼王不能用君之言任臣、又安能用君之言殺臣乎、トイヘルモ、彼ナル処ノ王ト云コトニテ、王ヲサシテ彼ト云タルニハ非ズ、王ヲ指シ云フナレバ、夫ノ字ナリ、彼ノ字ハ、トカク此方ニ居リテ、アチラニアル内ニテノ様子ヲ、推シハカリテ云ハントスルガタメニ用ユル字ナリ、論語ニ彼哉彼哉ト云タマヘルハ、一向ニ此方ノ引ナラビニ入云フベカラズ、アチラノ処ノコトニ問フ及ホセルカヒト云タマヘルココロモチニテ、云タマヘルニテモ、彼ノ字ハコト界疆ヲ別ニシタル処ヲ稱シ云フノ旨ナルコト、明白ナルベシ。

『助字詳解／彼』

【此】 此字彼ト對スル字ニテ、彼ニ引分ケテ、コチラニシキリヲ立テテ、ソノコチラノ内ナルニ、目ヲ付ケサシテ稱シテ、此ト云フココロナリ、サレバ此此字ハ、辞面ニ彼ト指セルコトハナクテモ、其辞意ニハ、必ズ物ニ引分ケタル、コノ物バカリニ心ヲトメサスルコトニシテ、指スココロニ用ユルコトナリ、詩小雅ニ、彼月而微、此日而微、トイヘルハ、

⁴皆川淇園の「正當無名」という術語は、ただ指示詞と名詞との関係だけでなく、更に『春秋公羊傳』の「常事不書」との関連において、「春秋公羊傳ニ、常事不書ト云モ、シレタル常式ノコトハ、春秋ニ記サヌコトヲイフタルコトニテ、正當無名モ、同ジ心持ナルコトナリ」『淇園文訣』(下/34)と説いているように、文章論にまで射程を持つものと思われる。

彼月ニシテ光ヲ失ヒ、晦日トナル筈ナリトモ云フベキガ、今此ハ日ニシテ光ヲ失ヒタルコトナリト云コトニテ、心ヲ此ト指ス處ニ、專ラ主トシテ打カカラシ、指シテ言ヘルナリ。

『助字詳解／此』

ここに展開されている皆川淇園の考えを整理すると、要するに、「此」は「我ガ身神ヲツケテ居ル處ヲ指シテ」いう、一人称的な指示対象を指すのに対して、「ココト離レテ分ナル處ニ、別ニカマヘアル其内ヲ指シテハ、彼ト云フ」ように、「彼」は非一人称的な指示対象を指すことになる。そして、「界疆」といい、「其内」といい、すべて指示詞における人称領域の存在を前提する表現であり、ここから、皆川淇園は、古代中国語の指示詞「此」「彼」の機能を人称体系との関連によって「一人称」対「非一人称」の対立として捉えたこと、更に、指示詞の機能を捉えるのに人称領域の画定を予想していたことが読みとれる。

これまでは皆川淇園の指示詞研究を見てきたが、ここでは、近代以前の中国で行われていた「此・彼」についての諸説の代表的なものを見てみたい。

「此」については、例えば清・劉淇『助字辨略』では、

此、又指物之辭。左傳莊公二十二年：“陳袁、此其昌乎”。“此”、謂敬仲也。

のように、「物を指す辭」としたり、あるいは、

此、指上之詞。如“此以沒世不忘也”之類。

(清・課虚齋主人『虚字注釋』)

のように、「上を指す詞(先行表現を指す詞)」としているのに止まっている。

「彼」については、清・王鳴昌『辯字訣』では、

彼、他有所指之辭。

のように、「他に指す所有る辭」としたり、あるいは、

彼、此之對、別有所指之詞、如“彼一時”之類。

(清・課虚齋主人『虚字注釋』)

のように、「此」とは対をなすことを説くことはあっても、ただ「別に指す所有詞」としているのに過ぎないのである。このように見てくると、皆川淇園の考え方は当時の日本だけでなく、中国においても、前例のない独創的なものであることが明らかになる。そして、次の引用が示すように、皆川淇園の知見は更に先行文脈の表現を受ける指示詞の文脈的な内容が次々に増幅され、その解釈がひとえに所与の文脈に依存するという現象の観察にまで及んでいる。

毎累倍所貼帶ノ法アリ、此ハ同ジ文字ヲ使ヒテ、後ニ累ルホドヅツ、其字ノ字アタリノ意味ニ貼帶スル所ガ倍スルコトナリ。

君子學以聚之問以辨之寬以居之仁以行之 易文言傳

此最初ノ之ハ常ノ通りナリ、サレドモ、他書ニテハ、之字ハ前ニアタリアルヲ指タルコト多キニ、此之ノ字ハ、前ノアタリナキニ書タルモノナレバ、後ニ見合セテ、其行ニ掛クベキ文義ノコトナリト知ルベシ、サテ辨之ノ之ハ、聚メタル所ノ物ヲ指セリ、居之ノ之ハ、其辨ジタル所ノ物ヲ指セリ、行之ノ之ハ、其居レル所ノ物ヲ指セリ、此ノ如ク、其義重累ニ随ヒテ倍增シテ行クコトニシテ見ルベシ。

『淇園文訣』（下／15-16）

これまで見てきたように、皆川淇園は、指示詞は名詞の代用ではなく、逆に名詞は指示詞の代用であるという認識に達したと考えられる。そして、指示詞は直接に物事を指し示すのに対して、名詞は「象」（物象・意味）を媒介として物事に関わるものであると考えた。更に人称との相関関係によって指示詞の機能を捉えたことは、中国と日本における前近代的な言語学研究の歴史の中で特筆すべき先駆的なものとして高く評価されなければならない。そして、「毎累倍所貼帶ノ法」のように、指示詞の意味解釈の文脈依存性に対する観察も「正當無名」と同じく指示詞の機能を見事にとらえたものであり、皆川淇園の指示詞研究のレベルの高さを示す一例と言える。そして、ヨーロッパやアメリカでは、言語についての言語哲学的な研究と実証的な研究はとかく別々に（場合によっては同じ人においても別々に）行われているのに対し、皆川淇園においては、この二つの側面は絶えず融合された見事な調和を示していることはその学説とともに興味深いところである。

2 構文論的な試み

前節では、皆川淇園の言語研究の中で特に指示詞をめぐる意味論的な試みを見てきたが、本節はその構文論的な試みを取り上げる。そのためには、まず皆川淇園の扱う文の単位を明らかにする必要がある。

二十世紀の言語学においては、長い間文(sentence)を文法論の扱う最大の単位とされてきたが、最近では、文よりも大きい単位を扱う言語理論が現われている事はよく知られている。勿論、近代以前の多分に表現論の域を出ない言語研究を無批判に現代の言語理論に比定することはできないが、両者の間には、その研究対象とその対象に対するアプローチの仕方には、自ずと類似した一面を有することもまた事実である。その最もよい一例が文法論の単位である。まず皆川淇園の取り扱った文法論の単位を見ることにする。

2.1 文法論の単位——「句」と「章・篇」

さて、皆川淇園は自らの言語研究の中で、一体文法にどのような単位を認めていたのだろうか。次の引用を見てみよう。

總ジテ古文ノ法一章ニテモ、一篇ニテモ、何程ノ長篇ニテモ、必ズニツ折レニナルモノニテ、其ニツ折レが打合テ、一章一篇にナリタルモノト心得ベシ、是第一ノ心得ナリ、是ヲ心得ザレバ、文ヲ書キテモ條理ヲ成スコトヲ得ガタク、古書ヲサバクニモ、古人ノ語意條理ニ、會通スルコトナルマジキナリ、篇ハ猶章ノ如ク、章ハ猶句ノ如シ、長短ノ相違マデナリ、サレバ一句一語トイヘドモ、亦皆句ト讀ト、ニツ折レガ打合ヒテ、一句一語トナリタルモノナリ。

『淇園文訣』（下／1）

このように、皆川淇園は自らの文法論の単位を「句」、「章」、「篇」としているが、これは表現論における伝統的な言語研究の中では特に目新しい考え方ではない。「句」、「章」、「篇」については、例えば古くは漢・王充は『論衡』において次のように述べている。

夫経之有篇也、猶有章句〔也〕。有章句也、猶有文字也。文字有意以立句、句有数以連章、章有体以成篇、篇則章句之大者也、謂篇有所法是謂章句復有所法也。

夫経の篇有るは、章句有るに猶る〔なり〕。章句有るは、文字有るに猶るなり。文字に意有りて以て句を立て、句に数有りて以て章を連ね、章に体有りて以て篇を成し、篇は則ち章句の大なる者なり。篇に法る所有りと謂はば、是れ章句に復た法る所有りと謂ふなり⁵。

『論衡／正説』

このように、文章を「句」、「章」、「篇」に分けること自体は、ただ常識的な考えを示しているに過ぎないが、しかし、注目すべきは、皆川淇園は、「一句一語トイヘドモ、亦皆句ト讀ト、二ツ折レガ打合ヒテ、一句一語トナリタルモノナリ」のように、「句」（文）の構造を二つの部分からなるものとしたうえで、その二つが「打合ヒテ」、つまり相互に関わりあって文ができると明言していることである。更にこの「句」の構成原理をそのまま「章」や「篇」にも応用したのである。これには文の二項性という文法論の重要なテーマが秘められているが、文の二項性については次節で取り上げるとして、いましばらく皆川淇園の「句」と「讀」の定義とその分析例を見てみることにする。

或コレヲ問ヒテ云フ、句讀ノコトハ、如何様ナルモノゾ、答テ云、論語學而時習之ハ、讀ナリ、不亦説乎ニテ句ナリ、此章ノ下ノ語、並ニ此句讀ヲ以テ準ジ知ルベシ、總シテ、讀ト云ハ語意未タ斷ゼスシ讀切ラルル處ガ皆讀ナリ、語意全盡ルガ皆句ナリ。

『淇園文訣』（下／1）

ここでは、「總シテ、讀ト云ハ語意未タ斷ゼスシ讀切ラルル處ガ皆讀ナリ、語意全盡ルガ皆句ナリ」としているように、「句」と「讀」をその文としての意味の完結性の有無によって分けている。そして「句」によって文の完結性が保障されていると考えているようである。これに続いて、皆川淇園は、「出則事公卿、入則事父兄、喪事不敢不勉、不為酒困、於我何有？」を次のように分析している。

⁵ この読み下し文は、山田(1984)を参照した。

出則事公卿、入則事父兄、喪事(、)不敢不勉、不為酒困、於我何有？

(讀) (句) (讀) (句) (讀) (章の句)

これは皆川淇園の説明を図式化したものであるが、これについては、「(於我何有)ニテ一章トスル」として、「下ノ於我何有ノ語意、上ノ四語ヲ承ケクルモノニテ、不為酒困ノ一語ヲ承ケズ、不為酒困ハ、別ニ一事ニテ、一本立チナル故ニ、此疑アルコト尤ナリ、此ハ上ノ出入ノ事、及ヒ喪事ノ勉ヲ、酒ノ為ニ困ミテ行ヒ得ザルノコトナクバ、上ノ三句ヲ暗ニ引承ケ持テ居リテ云タルコトトナリテ、自然ニ下ノ於我何有ノ句ト、ツリ合フコトニナル故ニ、讀トスルコトナリ」と述べている。このように、「於我何有」は関係的には、前の「四語」(それぞれ「出則事公卿」、「入則事父兄」、「喪事(、)不敢不勉」と「不為酒困」)全体を受けているため、章の句であり、「不為酒困」は前の三語をただ暗に受けているだけで、関係的には「自然ニ下ノ於我何有ノ句ト、ツリ合フコトニナル故ニ、讀トスルコトナリ」と考えているようである。これは必ずしも前の四語(三つの単位)を並列構造として了解してはいないが、前の四語が三つの単位として対等の関係に立って、それぞれ章の句にかかっているという了解の仕方のようなのである。

このように、皆川淇園は自らの扱う文法論の単位を「讀」・「句」・「章」・「篇」としているが、「讀」を「語意未タ斷ゼスシ讀切ラルル處」として文として未完結であることによって、「句」を「語意全盡ルガ皆句ナリ」のように文としての完結性によって規定し、「句」を言葉の基本的な単位としていることが明らかである。そして、「句」を基本的な単位としながらも、超文的な単位としては、「章」と「篇」が設けられ、原理的には「句」と同じものが適用され则认为していることが分かる。そして、その共通原理は「二ツ折レガ打合ヒテ」できるもの、つまり、二項への分節と同時にその二項間の関係の関わり合いにあると見ているようである。

2.2 文の二項性

文の二項的構成については、ヨーロッパの伝統文法や近現代の言語学では、例えば「主語」と「述語」や、「テーマ」と「レーマ」などの術語でさまざま論じられてはいるが、皆川淇園は文の内的構成を、単に二項への分節ではなく、二項間におい

て必然的に生まれるその相互関係によって文を捉えようとしていることは特に注目に値する。これは勿論単に現象的な二項的構成ではなく、二項の間にある関係の呼応統一を見ていることは、例えば次の引用によって明かである。

サテ右ノ於于ノアルベキ処ニ、省キテ書クベカラザル処アリ、此モ其省法ヲ知ラサレバ、置クベキ処モ知ラレマジキナリ、此ハ意ヲ用テ詳ニ考知ラズハアルベカラズ、此ニハ前ニモ略言ヘルトオリニ、文ノ語勢ニ二段ノ折レト云コトヲバ、先ツ詳ニ辨ジ知リテ後ニ、此差別始メテ分明ニナルコトヲ得ラルベシ、総ジテ天地間萬物ノ動止ハ、陰陽晝夜ノ道ニ漏ルコトハナキモノニテ、晝ヨリ夜トナリテ、其一日ノ事ガ一終スルガ、即萬物動止ノ則ナリ、右ノ則アルニヨリテ、トカク両々トナリテ一成スルコトニナル故ニ、夜ヨリ晝トナルモ、ヤハリ右ノ両ツツヅニナル規則ヲ以テ一成トス、サレバ幽ヨリ明ニ持チ合フコトニテ一成スルモ、ヤハリ右ノ規則ニヨリテノコトナリ。

『助字詳解ノ于』

ここでは、自然界の摂理によって言語表現としての原理を説くという論法であるが、「サレバ幽ヨリ明ニ持チ合フコトニテ一成スルモ、ヤハリ右ノ規則ニヨリテノコトナリ」のように、皆川淇園が説こうとしているのは、明らかに言語現象を説明するための道具立てとしての「幽・明」であり、ここには構文論的な関心のみならず意味論的な関心が見て取れる。皆川淇園の言語理論の重要な概念である。「幽・明」の意味については、後に触れるとして、とりあえずこれを二項の前項と後項としておく。ここで、二項間の関係に即して言うと、二項は互いに対立しつつも、相互に関係する（「持チ合フ」）ことによって二者は統一されるものであるということになる。これは単に認識論的な所説に止まらないことは、同じ段の少し後に続く以下の引用によって明らかである。

サレバ右ヲバ、人事ニカケテ云ヘバ、譬バ兼テカク思居タルガ、今斯ナツタト云ガ、即二段ノ折レナリ、総テ何事モ、皆右ノ二段折レニテ、物事ヲ形容シテ言フコトガ、人ノ言語ヲナストコロノ自然ノ常ノ道ニテ、譬ハヒダルカツタガ、コレデ腹ガ満タ、或ハセンド歩行タノデ、草臥タト言テキカシタレバ、合點シタナド云フ、日用ノ常語、何事モ二段折レニ

テ通用セザルハナシ、文章ノ語勢ハ、即チ日用ノ言語ヲ、文字ニ書キウツシタルモノナル故ニ、ヤハリ亦二段折レヲ以テ物事ヲワケ言フヲ法トスルコトナリ。

『助字詳解ノ于』

ここでは「兼テカク思居タルガ、今斯ナツタ」、「ヒダルカツタガ、コレデ腹ガ満タ」、「センド歩行タノデ、草臥レタ」と日本語の用例を挙げているが、これは勿論事柄を明瞭に説明するための配慮に止まらず、この「二段折レ」（文の二項性）は原理的には日本語にも中国語にも普遍的に妥当する概念であるという含みがあることも看過すべきではない。そして、ここからは皆川淇園の関心は、文の二項への分節、つまり二項それぞれの相関的な独立性と単位性に止まらず、分節された二項を統一するところの関係的な作用に向けられていることが読みとれる。更に、下線部の言葉が示すように、「幽」と「明」による「二段折レ」（文の二項性）は、ひとり文の内的構成に止まらず、人間の言語の基本的な原理として人間の精神の営みの根幹に位置づけられていることが特に注目に値するところである。

さて、「句」（文）の分節された二項をそれぞれ「幽」と「明」と名付けた皆川淇園は次のように「幽」と「明」を説明している。

物ニハ、又表裏陰陽向背アリテ、此裏背陰ハ、皆幽ノ属、表向陽ハ、皆明ノ属ニテ、物ヲ語ルニ、其ヲ併セテ喩サザレバ、通ゼヌコトアリ、右ノ文理ノースヂナルニ於テ、物ノ幽明ヲ併セテ語レバ、其明ナルガ、文理ノ正面ノコトナリテ、其幽ナルハ、其明ニ旁帯タル依リ物トナル、而ノ字ハ、イツニテモ、此幽明ノカスガヒニテ、幽明ヲ併セテモタスルタメニ、用ユル文字ナリト思フベシ、サレバ本邦ノ助辞ニ用ユルシテト云語ノ、次次ヲ立テユクタメニ用ユルトハ、全體ノ趣相違セル字ナリト心得ベシ、サテ右ノ幽明ト云コトヲ、古言ニ徴シテ知ラントナラバ、先ヅ論語ニ、學而時習之トアル學ハ、マナヒテオキテト云コトニ回ル故ニ、幽ナリ、時習之ハ當面ノコトナル故ニ、明ナリ。

『助字詳解ノ而』

この「幽」は言語表現の所与のもの、背景的或いは前提的なものを指して言う言葉であり、「明」は言語表現の未知のもの、前景的なものを意味すると了解するこ

とができる。一方、「幽」の「明」に対する意味関係にどういふものが含まれているかを見てみると、皆川淇園の挙げた次の用例は次の通りである。

- a. 兼テカク思居タルガ、今斯ナツタ。
- b. ヒダルカツタガ、コレデ腹ガ満タ。
- c. センド歩行タノデ、草臥タ。
- d. 學而時習之…… 『論語』
- e. 人不知而不愠。『論語』
- f. 知止而後有定。『大学』
- g. (北冥有魚其名爲鯢鯢之大不知其幾千里也)化而爲鳥(其名爲鵬)。『莊子』

例文の下線部は「幽」であり、「が・ので」や「而」を除いた残りの部分が「明」である。「幽」の「明」に対する関係も、a. と b. は先行する行為や状況的なもの、c. は原因節、e. f. は仮定条件を表すと解することができる。そして、d. と g. は、a.、b. と同じく、先行する行為や状況を表すものとして了解できよう。全体的に、「幽」は「明」のための前提条件や状況的なものといえる。

ここで指摘しなければならないのは、「句・讀」の所で「讀」として扱っていた「學而時習之」をここに「幽・明」の例として示していることである。「學而時習之」の後に続く「不亦説乎」を挙げていないから、この文の全体の関係についての皆川淇園の考えは詳かにしないが、「讀」としての「學而時習之」にも「幽」と「明」を認めたように、「學而時習之、不亦説乎」についても、おそらく「學而時習之」を「幽」、「不亦説乎」を「明」とすることになるかと a.—c. の用例によって推測することができる。このように、「讀・句」の間にだけでなく、「讀」の中にも「幽」「明」の関係を認めるということは、「句・讀」は文意の断れ続きを基にする文の構成分析であるのに対して、「幽・明」は文の二項間の論理的な意味関係を対象とする文の構成分析であるということに因ると考えられる。とすれば、この二つの分析方法が文の内的構成において相渉ることもこれまた自然の理である。これは先に見てきたように、皆川淇園の「二段折レ」(文の二項性)は言語の基本単位である「句」(文)のみならず、文よりも小さい単位「讀」と超文的な単位「章」・「篇」にも通用するとする皆川淇園の考えに依拠していると思われる。ちなみに、以上の七例の内、a.—f. は節

と節との関係と了解されるのに対し、g. だけは、節内部の構成に関わるものであるが、おそらく皆川淇園は「而」の介在によって「化」の独立性を認めたのではないかと推測される。

一方、中国では、文の二項性については、古くは論理学的な観点から「辭」つまり判断に対応する文の内部構造を「名」と「實」の二項的な構成によって分析する試みは『墨經』にある。それによれば、

【經】以名舉實、以辭抒意、以說出故。

『墨經／小取』

【經】所以謂、名也；所謂、實也；名實耦、合也。

(『墨經／上經』第八十條)

譚 戒甫(1964)によれば、ここに言う「實」はつまり主辭(Subject)のこと、「名」はいわゆる謂詞(Predicate)のことであり、「合」は繫詞(Copula)のことであるという(p.419)。しかし、ここに言う「名」はただ「此書是墨經」のような名詞文の謂詞(Predicate)に限らないことは例えば同じ『墨經』の次の言い方によって明らかである。

【經】謂：移、舉、加。

(『墨經／上經』第七十九條)

【說】謂○「狗犬」、命(移)也。「狗吠」、舉也。「叱狗」、加也。

(『墨經／上經』第七十九條)

このように、『墨經／上經』第七十九條の【說】に「謂」として挙げられている文の種類はそれぞれ「名詞文」(「命(移)」)、「自動詞文」(「舉」)と「他動詞文」(「加」)の三つになる。とすれば、「合」も、単に「名詞句」における繫詞(Copula)だけではなく、「動詞文」における「實」＝主辭(Subject)と、「名」＝謂詞(Predicate)との関係を言う言葉として了解しなければならない。しかし、ここにいう「實」と「名」との関係を見てみると、「以名舉實(名を以て實を舉ぐ)」のように、「辭」(判断に対応する文)の成り立つ所以はひとえに「名」＝謂詞(Predicate)によって「實」＝主辭(Subject)が統括されることに因るとされているようである。ここでは、「實」と

「名」との呼応統一による統一性よりは、「名」によって「實」が意味的にも構文的にも完結されるところの完結性に焦点があてられていると思われる。これに対して、皆川淇園は、「語意全盡ルガ皆句ナリ」としたり、「文ノ語勢」は「幽ヨリ明ニ持ち合フコトニテ成スル」としたりしているように、「句」における文の完結性ととともに、この完結性の由って立つところの「讀・句」、「幽・明」の二項間の呼応統一という統一性に重点が置かれていると言える。この考え方は一人皆川淇園に止まらず、皆川淇園ほど明瞭に説かれてはいないが、時を同じくする江戸時代の国語学者富士谷成章にも共有されている。

名をもて物をことわり、装をもて事をさだめ、挿頭・脚結をもて言葉を助く。

『脚結抄／大旨』

このように、西洋では、「主語」と「述語」によって、中国では、「實」と「名」によって、日本では、皆川淇園のように「讀」と「句」、「幽」と「明」によって、文の二項的構成についての観察や所説は古くからいろいろ説かれているが、現代言語学における文法論の中で、文の二項性を中心に据えて文法論を展開した興味深い研究に川端(1976)がある。川端(1976)によれば、

現実になれわれが何ごとかを知るとき、所与としての一つのことがらとそれに対する信憑(doxa)の結合、すなわち一つの情意的態度をわれわれは反省的に認めるであろう。それは、一つのことがらを他ならぬそれとしてもつこと、つまり特定に顕在化させることからその承認までを含む。このような、ことがらとそれに対する承認の結合が、現に在るものとしての判断なのであって、それが言語的には《文》に対応するのである。したがって、文が語に対して前提的であることは、ことがらがものに対して前提的であることそのことに根拠づけられていると言えるであろう。この一体的なことがらは、しかるに、承認そのことにおいて直ちに二項に(そして二項以上にではなく)分節され、かつ、分節された二項のものとして統合される。けだし二とは一であるもの、一であるものの構造的ダイナミクスであろう。二項的であるということが、われわれの知るという作用の顕在的な形式なのである。その一項は、知られるこ

との直接的な中核、それを中心として一つのことが在るところのそれであって、ここに始めてものが対象として分析されることになる。一次的な存在であることに對して、ものはいわばこのように追求されて存在するのである。そしてもう一つの項は、かかるものがこととしてわれわれに知られるその働き、それに觸発されて知る主体が対象に關係をもつその働きにあたるであろう。そして、この働きの部分とは、働きであることの根拠において、ものがこととしてあるその在り方に他ならない。一つのことがらが知られることの根底には、一つのことがらが或在り方をもって在るということが原理的に前提されねばならないであろう。

(中略)

さて、文は判断に對應する、とすれば判断の内部構造はこれまた文に對應して、その内部構造にあらわれねばならないであろう。そのとき、判断における上述の二項を、その判断に直接對應する文においてその主語・述語と呼ぶ。それはこれまで一切の、文における主語述語の論——日本語の主語は印欧語のそれと異るとか異らぬとか、日本語には主語がないとかあるとかの議論の一切と無關係に、判断および文についての上述の理解から、とりあえずここに下す規定なのである。かかるものとしての主語述語の呼應統一が陳述——山田孝雄における「陳述」だったのである。

(川端 (1976), p.173-174)

ちなみに、川端(1976)によれば、「この「陳述」は文の統一性を言う概念である。陳述の概念が文の完結性を言うものに移ることは、既に時枝誠記に始まる」(p.213)という。このように、日本文法学にとって極めて重要な概念である「陳述」の先蹤をなす考えは遠く皆川淇園・富士谷成章にまで遡ることができる。そして、皆川淇園・富士谷成章の考えは現代においては、山田(1908)を経て、川端(1976)へと受け継がれているのである。とすれば、「讀」と「句」、「幽」と「明」を用いて、文の完結性だけでなく、文の統一性にも注目した皆川淇園の考えの持つ意義が大きいと言わなければならない。

以上見てきたように、「句」(文)を言語の基本的な単位として取り扱った皆川淇園

は、その内的構成の分析において、「語意全盡ル」ことによって「句」における「文」の完結性を認め、更に、「幽」・「明」という「二段折レ」（文の二項性）によって、文の二項への分節だけでなく、分節された二項間の関係（「打合ヒ」・「持ち合フ」）の統一性によって文が構造的に保障されるという認識に達していたことが明らかである。日本や中国に限らず、西洋における前近代的な言語研究の歴史に照らしてもその認識の的確さと歴史的な意義は高く評価されなければならない。

2.3 語順の違いに見る名詞句の意味の違い

中国語と日本語との顕著な違いの一つに、語順の違いがある。一般的に、日本語の語順は比較的自由であるのに対して、中国語の語順はあまり自由は利かないといわれる。それだけ、中国語の語順は文法化されているわけであるが、現代のことはともかく、奈良時代の昔から、これは日本の中国語研究者には異様に感じられたに違いない。しかし、それを異様に感じることはあっても、言語研究の対象として語順の違いによって語の意味や文の意味を見ようとすることは、江戸時代においてさえ一人皆川淇園を除いては皆無であった。これについては、例えば、『問學舉要』には次のような観察が記されている。

只射法かくの如しと云ふ。則ちこれ天下の射法を謂ふ者と為す。しかしてその旨は、乃ち広該為り。吾が射法と云ふは、則ち是を己を衆に別つの辞にして、「射法」の二字、その旨乃ち狭窄を成す。これ乃ち分量・廣狭の別なり。大抵文中の語意、一人に係りて言へば、則ち是を分量狭しと為し、衆人に係りて言へば、則ち是を分量広しと為す。分量広きを、天下の共にする所の位と為し、衆の睹視する所を、顕明の地と為す。分量狭きを一人独抛の位と為し、衆の未だ必ずしも知らざる所を、幽隱の地と為す。この故に凡そ文の、その辞を措く所、唯その位の在る所に随ひて、その意乃ち不同と成る。譬へば、「赤日中夫人獨拜」と曰ふが如き、「赤日中」の三字その意広し。是を、これを衆の睹視する所に係けて言ふ者と為す。「夫人獨赤日中拜」と曰ふが如き、「赤日中」の三字その意狭し。是を、これをそれ人独抛する所に係けて言ふ者と為す。「夫人

獨揮赤日中」と曰ふが如き、「赤日中」の三字その意更に狭し。是を、言ふ者の独り知る所にして、衆の未だ必ずしも知らざる所の地と為す。故に補添して以てこれを見ず者なり。詩の「東方自出」「自東方出」「出自東方」の如き、文、三法を変じて、以て言ふ者も、亦須らく前法を以て準じてこれを知るべし。

『問學舉要／晰文理第五』

ここに述べられていることには、およそ次の二つの内容が含まれていると思われる。その一つは普通名詞句の総称的な用法と限定詞が付いた限定的な用法との意味的な違いであり、いま一つは、名詞句の文中の位置によってその意味が違ってくるという現象の把握である。ここで注意したいのは、ここにいう「分量・廣狹の別」(意味の違い)というのは、名詞の辞書的な意味ではなく、構文や文脈の中においてその名詞句の指示対象に対して、聞き手がどのようにしてその情報を入手し、またそれを所有するかというその入手の仕方、所有の仕方の違いとして考えられていることである。そして、「凡そ文の、その辞を措く所、唯その位の在る所に随ひて、その意乃ち不同と成る」というのは、表現の前提的な情報と伝達すべき情報、つまり情報の新・旧には、文の構造や語順が対応するという考え方も注目に値する。

一方、「句頭」と「句脚」については、皆川淇園は『問學舉要』の中で次のように述べている。

大抵、句頭を遍計の位と為し、句脚を主依の位と為す。

『問學舉要／晰文理第五』

皆川家旧蔵の皆川淇園による書入本『問學舉要』によると、「遍計之位」については、「ヲヲキウチデ、一ツヲトリイダスコトヲ遍計ト云フ」とあり、「主依之位」については、「主依ハトリイダシタルトコロノモノニ、ツケル心モチガココデヲチツクナリ」との書き入れがある。そして、「句頭」については、更に「大凡、句頭を主腦の位と為す」(『問學舉要／晰文理第五』)として、これには「頭腦、カンジンノドダヒガツクトコロ」との書き入れがある。

このように、皆川淇園は、文頭(「句頭」)に立つ名詞句は多数の中から取り出された、特定なものであり、主題的なものであるのに対して、それを受ける文末(「句脚」)

は、この取り出された特定なものについてかくかくしかじかのことを述べる位置であり、この場所は情報構造的にも重要であると考えていると思われる。更に、「ツケル心モチガココデヲチツク」という表現からは、「句脚」には話し手の主観を表わす助動詞や終助詞のような叙法を表す要素がくっついて、文の意味が完結するという現象を抑えていることが読みとれる。これは、先に見た、「讀」に対して「句」は「語意全盡ルガ皆句ナリ」とした立場にも通じるが、ここでは「句頭」と「句脚」という新たな二項によって文の内的構成を分析している。これは恐らく名詞句の文中の位置によってその意味が違ふという現象的な把握に止まらず、情報の新旧、文の情報構造における文頭と文末の機能的な差異についての所説として了解することが可能であり、いやそう了解すべきであろう。そしてこうした認識に到達するには、もちろん「讀・句」、「幽・明」、「句頭・句脚」をそれぞれ次元の異なるものとして認識することが前提であり、皆川淇園はすでにこの三者の次元的な差を意識していたと考えられる。

因みに、例文に用いた「夫人獨拝赤日中」は、『何氏語林』にある「夫人獨拝於赤日中」から、「於」を略したものであり、後の「赤日中夫人獨拝」や「夫人獨赤日中拝」は構文操作を加えて得たものである。「於」を省いたのはおそらく助字の意味の参入を排除して、純粹に文中の位置の違いによって名詞句の意味の違いを示すためであろう。それはともかく、具体的な言語観察に基づきながら、ただ記述するだけに終らずに、構文の変形操作を加えることによって、更に広く言語現象を捉え、それによって言語現象の背後の原理を見ようとするその研究手法にも、皆川淇園の中国語研究の奥深さを見ることができる。そこには、実証だけではなく、常に規範に対する鋭い目が光っている。

3 まとめ

皆川淇園の言語研究の中で、その意味論と構文論的な試みは一貫して機能的な観点によって行われた。全体的に、皆川淇園の意味論と構文論的な試みは、現代における機能主義言語学の考えに通じるものが多く、日本や中国における前近代的な言語研究の中で高く評価されなければならない。その中で特に以下の3点が注目に値する。

1. 皆川淇園は、指示詞を名詞の代用としてではなく、それを言語表現の根源的なものとして位置づけた。更に、古代中国語の指示詞の機能を人称との関連によって捉え、「一人称」対「非一人称」の対立とした。これによって、皆川淇園は、古代中国語の指示体系を明らかにしただけでなく、日本や中国では全く独創的で先駆的な考えを打ち立てた。皆川淇園の考えはフンボルト、パース, C. S. の所説にも通じるものであり、現代の言語学の中では広く認められている考えである。

2. 構文論的な試みとしては、皆川淇園は「句」(文)を言語の基本的な単位として取り扱い、その基本原理を「句」の二項への分節と分節された二項間の関係の統一性に求めた。その一方で、超文的な単位である「章」・「篇」にも「句」(文)と同じ原理が適用できると考えた。つまり、「句」(文)の内的構成の分析においては、「語意全盡ル」ことによって「句」における「文」の完結性を認め、更に、「幽」・「明」という「二段折レ」(文の二項性)によって、文の二項への分節だけでなく、分節された二項間の関係の統一性(「打合ヒ」・「持合フ」)によって文が構造的に保障されるという認識に達していた。皆川淇園のこうした考えは、日本や中国に限らず、西洋における前近代的な言語研究の歴史に照らしてもその認識の的確さと歴史的な意義は高く評価されなければならない。

3. 皆川淇園は、言語表現の背景的で前提的なものつまり所与の表現(「幽」)と、新たに伝達する前景的な表現(「明」)を区別する一方で、語順の違いによって名詞句の意味が違ってくるという現象に注目して、文の情報構造における文頭(「句頭」)と文末(「句脚」)の機能的な差異に対する観察を行っている。そして、その構文論的な試みは一貫して機能的な観点によってなされていることも特筆すべきである。

参考文献

- 泉井久之助(1967)『言語の構造』紀伊国屋書店。
- 泉井久之助(1976)『言語研究とフンボルト』弘文堂。
- カッシーラー(1989)『シンボル形式の哲学 第一巻 言語』生松敬三、木田 元訳、岩波書店。
- 川端善明(1976)「用言」『岩波講座 日本語 6 文法 I』岩波書店、169-217頁。
- 譚 戒甫(1964)『墨辯發微』中華書局。
- 鄭 奠・麥 梅翹(1972)『古漢語語法學資料彙編』中華書局香港分局。
- 中田祝夫・竹岡正夫(1960)『あゆひ抄新注』風間書房。
- パース, C. S. (1986)『パース著作集 2 記号学』内田種臣編訳、勁草書房。
- ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(1984)『言語と精神——カヴィ語研究序説——』亀山健吉訳、法政大学出版局。
- 山田勝美(1984)『論衡(下)』新釈漢文大系 94、明治書院。
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』寶文館
- 李 長波(1997)「日本語の指示体系の史的変化について」『国語学会平成8年度秋季大会研究発表要旨』『国語学』第188集、53-54頁。
- 渡辺 実(1991)「『わがこと・ひとごと』の観点と文法論」『国語学』第165集、1-14頁。
- Brugmann, Karl (1904), Die Demonstrativpronomina der Indogermanischen Sprachen, Eine Bedeutungsgeschichtliche Untersuchung. Des XXII. Bandes der Abhandlungen der philologisch-historischen Klasse der Königl. Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften. LEIPZIG BEI B. G. TEUBNER, 1904. pp.1-151.
- Jakobson, Roman (1942), The Paleosiberian Languages. *American Anthropologist*. Vol.44, No.4, Part 1, pp.602-620.
- Peirce, Charles Sanders (1893), Speculative Grammar. *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, Volume II ELEMENTS OF LOGIC. pp.129-269.

書誌と本文

『問學舉要』(刊本一卷、安永3(1774)年)京都大学附属図書館蔵。

『助字詳解』(刊本三卷、文化8(1811)年)『漢語文典叢書』(汲古書院)所収影印本。

『淇園文訣』(刊本二卷)京都大学附属図書館蔵。

なお、引用に際して、『問學舉要』は『日本思想大系 近世後期儒家集』(中村幸彦校注、岩波書店)所収の活字文を原本と併せて参照した。

(1998.2.14.脱稿)

Summary

On the Linguistic Studies of Kien Minagawa: His inquiry into semantics and the construction of sentences

Changbo LI

Kien Minagawa (1734–1807) is known as a Japanese Sinologist of the Edo period. The present author would like to argue that Minagawa's linguistic inquiry into semantics and the construction of sentences is worth noticing for the following four points:

1) Minagawa considered that demonstratives are at the root of language, and that they are not mere substitutes for substantives. His idea about demonstratives is common to Wilhelm von Humboldt and Charles S. Peirce in the West.

2) He linked the function of classic Chinese demonstratives to the system of person (first person vs. non-first person) for the first time in East Asia.

3) He considered that a sentence is constructed by the binomial elements, and he was especially concerned about the relation between the binomial elements ('tou (讀)' · 'ku (句)', 'yuu (幽)' · 'mei (明)').

4) He clearly recognized that the meanings of a noun phrase vary according to the word order, and considered that the head of a sentence is different from the end of a sentence in the information structure of the sentence.